
暗黒街の狩人

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗黒街の狩人

【Nコード】

N1485T

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

フランス1の港都市として繁栄しているマルセイユ。

そのマルセイユにある共同墓地。

季節は6月。

雨が頻りに降り続ける嫌な季節である。

そんな雨が降る嫌な季節でありながら共同墓地に訪れる一人の女性が居た。

黒い喪服に身を包んだ女性は黒いベールが付けられた帽子を被って歩いていた。

花束は無い。

そして一つの墓石に立った女性は自分の名を、人生を捨てると述べた。

今日から生まれ変わる、と。

今日から私の名は・・・・・・・・・・

序幕・墓前での誓い（前書き）

伯爵シリーズの一つです。

また前に出たキャラが名前だけ出て来たりしますので、他の作品も宜しければ読んで下さい。

序幕・墓前での誓い

フランスのマルセイユにある共同墓地。

その日は誰かが死んだかのように静寂が支配しており、雨が絶え間なく降り続けていた。

雨が共同墓地に埋められた墓石を容赦なく打ち続ける。

共同墓地には幾つもの墓石が立ち並んでいる。

その多くある墓地の中に立つ墓石の前で一人の女性が立っていた。

目の前には墓石が3つ立っていた。

何の変哲もない上を丸くされた墓石で特に目立つような物は無い。

だが、中心にある墓石にはこう書かれていた。

『ここに安らかに眠る者、我が生涯の中で最高にして最愛の友』

女性の夫であった男の親友であり主だった男が書き記した文字だ。

金髪のロングヘアを頭の上で纏めていた。

黒い喪服を着て、黒いベールが付いた帽子を被っていた。

年齢は、27、28歳で脂が乗り切った身体をしている。

「今日から貴方を・・・貴方達を忘れるわ」

女性は網のベールが付いた帽子の中から小さな口を開いて、喋り出した。

「貴方と子供たちを忘れるわ。貴方達も私を忘れて。私は・・・もう貴方達が知っている・・・貴方達が愛していた女では・・・アナではないわ」

とても静かな声で、淡々と言葉を述べる女性。

「私は今日から生まれ変わる。血と狂気を身に宿し、地獄の業火で焼かれる者となるわ」

それが自分に対しての罪滅ぼし。

愛する夫の留守を護れず、愛する子供たちを護れなかった愚かな自分に対しての。

「だから、貴方達は天国で仲良く暮らして。私は一人で地獄へと堕ちるわ」

そして貴方に代わりあの方を護り抜く。

どんな相手からも・・・例え、貴方達であろうと。

「今日から私はアンナを捨てる。今日からは・・・」

雨が更に激しさを増し、雷鳴が聞こえてきた。

ピカツ、と光が近くで輝いた。

そのため女性が何を言ったのか聞き取れない。

しかし、唇の動きで確認できた。

今日から私の名は・・・ザミエル。

魔弾の射手として、あの方に敵対する者共を何処までも追いつけて
狩り仕留める魔王。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

女性は首から一つのペンダントを取り出した。

ロケットだった。

中には夫と子供の写真があった。

「これも必要ないわ。魔王に家族は・・・必要ないから」

無表情にロケットを墓に落とした。

カラン、と乾いた音が雨の中に小さく響く。

ロケットは墓の上に落ちた。

その上に雨がしきりに降り注ぐ。

「それじゃ・・・さようなら」

女性は墓石に背を向けて立ち去った。

その背中は無然としていたが、とても小さく哀傷を誘つ背中であつた。

第一幕：魔弾の射手

フランス最大の港都市として栄えるマルセイユ。

海の幸が毎日、市場で売り買いをされヨットや漁船が青い海を泳ぐ。

そのマルセイユに一軒の小さなカフェ店がある。

レンガで造られた店で、フランスでは当たり前前のオープンカフェだ。

カフェの名前は「魔弾の射手」という風変わりな名前である。

これは、ドイツの作曲家ウェーバーが作ったオペラ「魔弾の射手」から来ている。

このオペラはドイツのロマン主義を確立させた記念的な作品であり、新しい音楽をドイツに齎した作品としても知られている。

この店の主がドイツ人であり、尚且つ射撃の腕前が良い事から名付けられた。

店の主は女性で名前をアガールテ。

魔弾の射手に出て来るヒロイン的な存在の名前だ。

そのアガールテという女性は御歳31歳になるが、未だに無駄な肉一つ持っておらず艶やかな身体付きを誇っている。

アガールテに求婚する者は後を絶たないが、彼女は断固として聞き入

れようとはしなかった。

どうしてかと理由を聞いても彼女は無言で答えようとしな

だが、彼女の明るくて優しい心遣いに客達は、いつも訪れては世間話を

「アガートさん。カフェ頂戴」

一人の客が紺色のブラウスにロングスカートに白いエプロンを腰に巻いて、忙しく動いている女性に声を掛けた。

「はい」

アガートと呼ばれた女性は振り返った。

金系の髪を頭の上で纏めていた。

明るい碧色の瞳は、大らかな光を放っていた。

アガートは直ぐに奥へと行き、カフェを作り始めた。

フランスでカフェと頼めば、エスプレッソが出て来る。

そのためカフェを頼みたい場合は、カフェ・“アロンジエ”と付け加える必要性があるのだ。

5分ほどでエスプレッソもといカフェを用意したアガートは、外にあるテーブルに持って行った。

「はい。どうぞ」

「ねえ、今度二人でデートしない？」

「御免なさい。そういう類いの誘いは断っているんです」

バツサリと言い切るアガーテ。

そしてまた戻って行った。

「ガードが堅いな」

カフェを頼んだ男は、苦笑しながらカフェを飲んだ。

「仕方ないさ。あの人は、心に決めた男性が居るって噂だ」

同じテーブルに座る男が新聞を捲りながら、噂で聞いた事を言った。

「本当かよ？て事は、結婚も？」

「考えているだろうな。だが、男の方はどうかな？」

「どう言う事だよ」

「よくあるだろ？不倫とか遊びだけの恋とか」

「アガーテさんに関しては無いだろ？」

「いいや。恋は盲目と言うだろ？例え、向こうが遊びの恋と考えていても女ってのは一途だぜ」

「アガーテさんを泣かせたら俺が殺してやるっ」

些か物騒な事を言う男に、新聞を読んでいた男は苦笑した。

『殺してやる、か。お前さんが逆に殺されるぞ？何せ相手は・・・伯爵様だからな』

そう・・・アガーテが愛した男は、暗黒街の領主と謳われる伯爵だった。

ただあくまで噂だ。

だが、アガーテが誰かを想っているのは、周知の事実とされている。本人は黙して語らないが、もはや事実と周囲が決めているのだ。

午後の13時。

やっと客足も落ち着いた所で、アガーテにも昼食の時間がやってきた。

「ふうー、やっと昼食に有り付けるわ」

テーブルに腰を降ろして、自分で造ったカフェを飲む。

これから昼食を取ったら、暫くは自由時間とも言える。

午後を過ぎるとさほど、人が来ないのだ。

今日はアルバイトの学生が夕方に来る。

最初は一人で切り盛りしていたが、やはり一人では荷が重いし、運用も充実してきた事から学生を2人ほど雇った。

どちらも大学生で、学費を稼ぐ為に働きたいらしい。

その純真な心にアガートは心を撃たれて、一気に二人も雇ったのだ。昼食を終えて、暫くシャンソンを一人で聞いていると洒落た電話機が鳴り始めた。

「はい。こちら魔弾の射手です」

『……………“ザミエル”。仕事を頼みたい』

ドスの効いた低い男の声が受話器越しに聞こえて来る。

「はい。どのような注文でしょうか？」

対してアガートは、まったく顔に出さず流れる動作で聞いた。

『少し掃除を頼みたいんだ』

「畏まりました。では、夕方の18時にそちらに行きますが、良いですか？」

『ああ。頼む』

ツー、ツー

電話が切られた音が受話器から聞こえてくる。

「掃除、か。あれからもう3年も経つのね」

あの日から、ザミエルと言う名と魔弾の射手という称号を得てから既に3年という月日が経過している。

そんな事を改めて実感するアガーテ。

あれから3年も経つのに、まるで衰えた気持ちがない。

寧ろ以前より洗練された気がする。

「きっと人間を捨てたからね」

3年前に人間を捨てた。

その時から以前の名前も捨てた。

過去も家族も経歴も全て。

アガーテは久し振りの本業だ、と自身に言い聞かせた。

3年前に人間を捨てたアガーテだが、その3年間で請け負った本業は僅かだ。

殆ど請け負っていない。

いや、殆ど請け負う事も許されなかった、と言うべきであろうか。

彼女が仕える主は、自分に対して何処か負い目を感じている。

だからだろうか？

この店を任された。

きっと裏の世界で生きずに表の世界で、生き甲斐を見つけて欲しいのだろう。

『あの方も……過去に傷を負う者、なのね』

過去に傷を負う者だからこそ、自分の気持ちを痛いほど理解している。

あの男の過去は噂程度で知らない。

あの男自身が話そうとしないからだ。

アガール自身もそれを無理に聞こうとはしなかった。

「どんな仕事かしらね……………」

最近表の仕事が忙しくて、ライフルを持つ事も無かった。

そのブランクをどうにかして回復させないと不味い、とアガールは思った。

夕方になり、バイトの大学生が来た。

「私はこれから出かけるから店番を宜しくね」

「何処に行くんですか？」

「古い友人に会いに行くの」

「友人？」

「ええ。とても良い方だけど、哀しい方よ」

とても深く、底が見えない沼のように深い悲しさ。

その古い友人を話すアガーテは、本当に哀しそうな顔をしていた。

普段とは違う。

そうアルバイト生は思った。

「その人をアガーテさんは、助けたいんですか？」

「ええ。私の恩人であり……大切な方だから」

そうアガーテは答えて店を出て行った。

アガーテが向かった場所はマルセイユの丘に立つ白い家。

ここは古い友人であり大切な人が住む家。

その家まで徒歩で行き、ドアに付いた鈴を鳴らす。

すると、ドアが開いた。

「久し振りだな。ザミエル」

ドアを開けて出て来たのは男だった。

身長は192cmもあり、アガーテより頭が2つ分もある。

黒い髪を一本に纏めており衣服も黒尽くめで、その姿はまるで黒い悪魔だ。

端正な顔立ちで東洋系と西洋系の血が上手く混ざり合い、彫が深い顔立ちとなっていた。

しかし、右目の眼帯が常人ではない男という事を思わせている。

「お久し振りです。・・・我が主」

アガーテは、片膝を地面に着かせて、男の右手を取り恭しくキスを落とした。

彼女なりの忠誠を表しているようだ。

「元気そうで何よりだ。入れ」

男はアガーテの肩を掴んで優しく立たせて、中へと入れた。

中に入ったアガーテは一步後の感覚で男の背中を追った。

とても大きな背中でありながら、とても小さな印象を受ける。

まったく矛盾しているが、そうなのだ。

居間へと通されると一人の女性が酒を飲んでいた。

茶色の長髪を男と同じように真後ろで一本に纏めたスタイルを取っている。

こちらは、ブラウン色などの色を好んで着ている。

年齢は男より若く20代半ば位で、こちらも端正な顔立ちであるが、何処か危険を好むように見えた。

赤ワインのように赤い道を好き好んで歩くような女だ。

しかし、決して無闇に進むようには見えなかった。

黄緑色の瞳がこちらを見た。

澄んだ瞳で何処か面白がっている眼にアガーテには見えた。

「久し振りね。“ザミエル”ちゃん」

女はアガーテの渾名をちゃん付けで言った。

「お久し振りです。ガブリエル様」

アガーテは、女性の本名を言った。

「どうかしら？表の職業は」

「充実しております。しかし、私には闇の世界が似合っており、痛感しております」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男はそれを聞いて無言の顔を更に貝のように閉じて、懐から煙草を取り出して銜えた。

「そう。私は、貴方が生きたいようにすれば良いと思っているから良いけど」

ガブリエルと言われた女性はグラスを煽り、アガートにこう言った。

「それで、どうなの？今回の仕事は」

「御引受け致します。しかし、3年間のブランクはとても大きいです」

「尤もだわ。常に硝煙と血の匂いを銃に嗅がせておかないと、どんな猟犬も鼻が廢るからね」

「期日はどれ位、頂けますか？」

それは、この人に聞いて。

ガブリエルは煙草を吸う男に眼をやった。

男は無表情な顔をしていたが、よく目を凝らして見れば、迷っていると解かる。

「我が主よ。この狩人の質問にどうかお答え下さい」

いつまで期日を頂けますか？

男は、我が主と言われた男は暫く無言だったが、答えた。

「………1ヶ月だ」

「畏まりました。では、その日まで必ず獲物を仕留め、貴方様に献上致しましょう」

「決まりね」

ガブリエルはグラスをテーブルに置いて、茶色の封筒をアガーテに渡した。

「これが今回の獲物の資料よ」

アガーテは、封筒の中身を開けて見た。

「ハンター・ティモンズ。元フランス警察でGIGN・フランス国家憲兵隊介入部隊に所属していた警部だが………現在は、殺し屋」

遠距離での狙撃が得意でその距離は、1000mにも及ぶ。

ライフルはG I A T F R - 1ボルトアクション式ライフル。

アガーテは流れるように資料を読む。

「狙撃という事もあって、私たちより貴方に向いていると思ったのよ」

「ブランクを直すには、もってこいの獲物です」

「と言うと？」

「ここに来るまで考えておりました。これからは、闇の世界の仕事をもっとこなそうと」

つまり爪先まで踏み込んでいた足を片脚とまで言わず、両足ともども入れようと。

「それは……………」

男が、何かを言おうとした。

「我が主。私は貴方の僕です。しかし、パンサー殿達と違い、私は狩人です」

どうか聞き届けて欲しい。

私の願いは、貴方に害なす者共を容赦なく狩る任務が第一。

決して表で幸せになろうとは思っていない。

だから、どうか聞き届けて欲しい。

私は狩人であるが、犬ではない。

どうか、自分の意思を聞いて欲しい。

お願いです。

どうか、どうか聞いて下さい。

「……………考えておく」

男は苦しい言い訳に近い言葉を述べた。

「主……………」

「ザミエルちゃん。この人の気持ちも少しは組んで頂戴」

ガブリエルが静かに語り掛ける。

先ほどまでの声とは違い、静かで制止させる力がある。

「分かりました」

アガーテは静かに片膝を着いた。

「我が主。必ずや獲物を仕留めて御覧に入れます」

「ああ……………」

男は煙草を灰皿に捨てて頷いた。

その背中が、何処かやはり小さかった。

第二幕：森林と狩猟

アガーテはヨーロッパの最大の自動車メーカー、ルノーの車ルノー・25 - ヴァンサンクを駆ってマルセイユ郊外に出ていた。

ヴァンサンクは最高車種ルノー・20の後継機として生まれたハッチバック型の自動車だ。

過去には大統領、駐日フランス大使などの公用車として愛用された経験があるからその性能と気品が窺える。

これは3年前に愛車を破棄した時に新たに買った車でずっと愛車として使用している。

アガーテが目指す場所は人知れずにある秘密の森。

マルセイユから2時間ほどの掛る場所で近くの村は向かって1時間から2時間の距離もある。

そこで銃の練習をするのだ。

その森は伯爵の私有地で動物たちと植物の楽園とも言える場所だ。

2時間ほど掛けて森に到着した。

この森は昼間でも暗く人も私有地と言う事もあり来れないから射撃の練習には持って来いの練習場所だ。

ルノーから降りたアガーテはシューティングサングラスを外した。

服装はデニムのパンツに歩き易いシューズ。

上着はオレンジ色の狩猟ベストだった。

腰まで伸びていた金髪は真後ろで纏めている。

「……懐かしいわね」

ここで3年前に自分は初めて射撃をした。

拳銃からサブマシンガン、アサルトライフル、狙撃銃などを撃って練習をして格闘技なども学んだ。

あの時は強くなりたかった。

ただ、それだけの事であった。

暫く森の空気に感じていたが直ぐに後部座席のドアを開けて、黒いナイロン製の細長い鞆を取り出した。

中にはライフルが入っている。

森の中に足を踏み入れる。

一歩踏み出す事に森が拒否するように木がざわめく。

しかし、アガートには聞き慣れた物であった。

暫く歩いて行くと小さな湖が見えた。

ここも覚えている。

初めて……夫以外に女を捧げた場所。

あの時は雨が降った上に風が強く、とても酷い夜であった。

そんな夜に自分は妻と言う名を捨てた。

「……懐かしいわね」

あの時から、いや、その前から自分は名も性も全て過去は捨て去った。

何時までも悔やみ続けるのは嫌だったし、何より思い出すのが嫌だった。

だから、抱いてくれるように頼んだのだ。

相手はかなり嫌がっていたが、自分の意志の固さに根負けし結局は抱いてくれた。

かなり罪悪感を覚えていたのを終始、覚えている。

アガートにはそれが嫌であり我慢できなかった。

あれは彼のせいではない。

元夫のせいでもない。

敵が悪いと言えるが、向こうも向こうなりの大義名分があるから必ずしも悪とは言えない。

だが、とアガーテは思う。

居るかどうかも分からない相手の啓示を受け、何をやっても許されるという考えは絶対に悪だ。

だから、そんな組織や者を見ると否応なく鉛弾をお見舞いしたくなる。

そんな事を考えていると大きな風が吹いた。

髪が乱れるのを右手で抑える。

風が止むのを待ってから、彼女は再び歩き出した。

更に森奥へと進むと、小さな小屋が見えた。

自分の主人が建てた小屋で見た目は木製だがそれはダミーだ。

窓ガラスは対物用ライフルも通さない防弾ガラスでドアには鋼鉄の鉄板を埋め込んである。

更に丸太の中にも鉄筋コンクリートを埋め込んであるから、籠城しても簡単には落とせないようにされている。

ドアに近付いて、鍵を取り出して開けた。

ギィ

と音を立てドアが開く。

直ぐ隣にあるスイッチを入れて、明かりを点けてから中に入る。

鞆を木製のテーブルに置いてから椅子に座った。

ドアは既に閉じてある。

軽く息を吐いてからナイロン製の鞆を開けた。

中には一丁のライフルが入っていた。

スイスの老舗銃器メーカーSIG社が開発したアサルトライフルSG550だった。

世界的に見ても優れた銃器メーカーであるSIG社が作り上げたSG550。

AK-47を参考にした故に故障なども少なく、極めて扱い易いアサルトライフルと認識されているが高額で主に司法組織や特殊部隊など極一部のものだけが使用する。

しかし、スイスは中立国をモットーにしているから、国民すべてにSG550を持たせると同時に訓練をしている。

スイスは山岳地帯が多いゆえに狙撃などを重点に置いている。

そのため、NATO軍が採用している5.56mmよりも更に遠距離狙撃が可能な5.6mm×45弾を使用している。

更に夜間射撃用のナイト・サイトを標準装備している程だ。

元から命中率が高いアサルトライフル故に高倍率のスコープを取り付ければ、H&K PSG1に匹敵する狙撃銃に早変わりする。

アガーテのSG550には2脚と高倍率のスコープが装着されていた。

だが、このライフルはあくまでアサルトライフルだ。

それ故にどうしても狙撃専門に造られたライフルに比べると射程距離が短くなる。

5.6mm×45弾を使用してもやはり他のライフルに比べると劣る。

これで今回の獲物を仕留める事が出来るか？

「獲物を仕留められるギリギリの射程まで近づくしかないわね」

もしくは狙撃以外の手で殺すかだ。

狩りの名人は獲物を確実に仕留めるため自ら獲物に近づく。

確実に仕留められる距離まで近づく。

これこそ狩りの名人の真髄と言えるだろう。

狙撃以外の手で殺すとなれば近距離で殺す事になるだろう。

それはアガーテとしては難しかった。

書かれていた資料では、元GIGNのメンバーだけあって空手は黒帯で柔道も習得していると言う。

更にキックボクシングもこなし、拳銃でも50メートル的に全弾を命中させる事も可能と言う驚異的な射撃術を誇っている。

「かなりきついわね」

ブランクがあり、更に格闘技が苦手なアガーテには不味い相手だった。

だが、この獲物を仕留めて主に献上すると明言した。

そしてこの獲物を仕留められたら恐らく更に自信が付くだろう。

極端なほど自信が無いのも問題だが、自信があり過ぎるのも問題である。

この相手ならそこそこの自信を付けられるから申し分ないと言える。

SIG SG550を鞆から取り出して半透明のマガジンを抜いた。

半透明にする事により残弾数が幾つあるか明確に確認が出来る。

全弾装填しているから30発だ。

銃口にサプレッサーを取り付けた。

アメリカではサプレッサーを使用する事は禁止されているが、ヨーロッパでは射撃の音が煩かったり、獲物を逃がす事もあるためサプレッサーを使用する事が認められている。

要は国によって見方も違うのだ。

サプレッサーを取り付けて、アガーテは小屋を出た。

小屋の直ぐ前にある木にナイフで的を描いた。

それから300メートルほど離れてスコープを覗き見る。

高倍率のスコープだけあってよく見える。

人差し指をトリガーに掛けて引いた。

サプレッサーを取り付けているため極めて小さい音が出た。

弾は的から大きく右に15センチも外れた。

「やはり……………」

アガーテは直ぐに倍率などを調節し始めた。

映画などでは鞆から出して直ぐに狙撃するが、あれは間違いだ。

スコープというのは非常にデリケートな代物だ。

特に温度差が激しいとスコープがぼやけて見えてしまう。

更に高倍率だとそれが顕著な程に出てしまうから痛い所だ。

アガーテとしてもスコープが余り好きではなかった。

ただ、確実に相手の眉間か心臓を狙う為にスコープを装着しているに過ぎない。

実際、スコープ無しで狙撃するのはかなり難しい。

これができるのは極一部の限られた才能と努力をした者たちだけだ。

射撃はそれなりに出来る方だが、やはりまだスコープ無しでは心もとない。

スコープを外して倍率などを細かく調整しては何度も試射をする。

何発か無駄撃ちして、やっと的に命中した。

更に細かく調整して的中心に当たったのは全弾を撃ち尽くす5発前だった。

「・・・ブランクは怖いわ」

ブランクが長いとこんなにも感覚が鈍る物か、と思う。

ポケットに入れていた銀製の懐中時計を取り出してボタンを押して蓋を開けた。

時計の針は12時を指そうとしていた。

「そろそろ狩りに行くこうかしら」

ここには3日ほど居る積りだ。

たかが3日でブランクを直せるとは思っていないが、表の世界での仕事も考えて難しいのだ。

SG550を持ち適当に足を動かして獲物を探す。

今は秋の時季だから冬眠前に熊などが出ている筈だ。

それか鹿のどちらかだろう。

3日分の食料を得られるなら、熊が一番だ。

別に生のまま食べても良いし、少し臭くても構わない。

昔なら口が拒絶していただろうが、狩人になってからは気にもしなくなつた。

一々、そんな細かい事を気にしていたら生きていけないのだから。

1時間ほど時間を掛けて歩いていると、鹿を見つけた。

木の実か何かを食べているのだろう。

こちらに気付かない。

ふと横を見ると子供が居た。

子供を見ると、過去を思い出す。

『あの子たちも若くして死んでしまった』

胸に弾丸を撃たれて、血を流して、死んだ。

自分はそれを黙って見ているしか出来なかった。

代わりに盾になることも出来なかった。

しなかったのだ。

怖くて、自らの命が大事で。

鹿の親子を見ていると無性に狩りたい、という衝動に襲われた。

本来なら親子連れの獲物を仕留めるのは、駄目だ。

親を亡くした子供一人で生きていけるほど自然は優しくくない。

直ぐに狼や熊の餌食だ。

それか冬の凍てつくような寒さに負けて野たれ死ぬ。

だから、親子連れは殺さない。

アガーテの主も親子連れは身の危険が無い限り、仕留めない。

その部下である自分が破るのか？

『・・・・・・・・出来ないわね』

静かに構えていたSG550を降ろして、別の獲物を探した。

今度は大きな足音と糞を見つけた。

大きさから見て熊だろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

熊は非常に臆病な生き物だ。

人間を見れば逃げる。

だが、人間が変な真似をすると襲い掛かるし、人間が先に逃げると追ってくる。

所謂、追跡本能とも言える行動だ。

それか子供を産んだばかりだと余計に気が昂ぶって危険だ。

しかし、今は冬眠前だから、先ず子連れは居ないだろうと思った。

熊は冬眠時に子を産み、育てるのだから。

足跡と糞を見て、まだ新しい物と解かり、追跡した。

犬は居ない。

狩猟において犬は絶対不可欠だ。

“ 1 に犬、 2 に足、 3 に銃 ”

と言われるほど犬は大事なのだ。

獲物を追跡し、狩人が仕留め易い環境を作る。

犬の種類によつて大きく異なるが、大体はこんなものだ。

アガーテは犬を飼っていない。

犬が欲しいと思うが、仕事が忙しく中々ペットショップに行けないから仕方が無い。

一人で熊の後を追った。

熊を追跡して仕留めた頃には既に夜になっていた。

第三幕・雨と風

熊を仕留める事に成功したアガーテだが、その巨体を運ぶのに苦勞した。

どうせなら熊ではない鹿などが良かったと今さら後悔しても遅いが後悔する。

何とか苦勞して一人で夜を通して小屋へと帰った。

ドアを開けて熊の死体を直ぐ様、解体して水風呂に内臓などを入れて冷やした。

よくて3日間は、冷やさないと肉が臭くて不味い。

しかし、適当な部分を見つけては軽く火で炙ってから食べた。

生でも食べれなくないが、火を通した方がやはり衛生的に良いからである。

熊の肝臓などを食べながらアガーテは今の自分と昔の自分を比べて見た。

昔の自分は何も知らないただの庶民でしかなかった。

夫の仕事が仕事だけに危険があるのに、だ。

では今はどうか？

今は危険な仕事を生業としている。

昔とは偉い違いだ、と自分に苦笑しながら変われば変わる物だ、とも思う。

そしてふとマルセイユの白い丘に建つ家に住む主を思い出していた。

『あの方は・・・今頃は何をしているのだろうか？』

今頃は酒を飲んでいるのか？

それとも自分以外の・・・牝を抱いているのだろうか？

アガートが仕える主・・・伯爵は一人身だ。

一人身だが、女と無縁という訳ではない。

だから、恐らく女を抱いているかもしれない。

それを考えると身も心も狂いそうな気持ちに襲われる。

今からでも戻って伯爵に身を委ねたい気持ちだ。

しかし、何やら外がやけに煩いと思って窓を見てみた。

雨が降っていた。

「・・・泣いているわね」

きつと雨の中を一人で、泣いている事だろう。

子供のように大声で、涙を流して、泣いている事だろう。

その傍に自分が居ない事に少しばかり歯痒い気持ちを感じた。

主の傍に居ず、泣いていると知りながら何も出来ない自分。

そんな自分に嫌になる時がある。

あの時もこんな雨が降っていた。

雨の中、彼は自分に傘を差してやり、自らはずぶ濡れでいた。

その時は、分からなかったが泣いているのだと今は解かる。

帽子を取っていたから顔にも水が上から滴り落ちる。

だから泣いていると分からなかった。

だが、今は解かる。

『あの方は泣いている。嗚呼、慰めて上げたい』

自らが赴いて、思いのままに自分の胸で泣かせて上げたい。

きっと服は水び出しになるだろうが、それで良い。

あの方の涙を受け止められるのなら服の一着位は安い物だ。

アガーテは降り続ける雨を見ながら、熊の肉を食べ続けた。

食事を終えてもまだ雨は降り続ける。

風呂は熊の肉を冷やしているから入れない。

ならば、どうしようか？

答えは直ぐに出た。

衣服を脱ぎ出して、全裸になる。

無駄な肉一つない裸体を惜しげもなく晒したアガーテは一本に纏めていた髪を解いた。

音を立て金糸が靡く。

ドアを開けて雨が降る外に出た。

雨がアガーテの身体を濡らす。

その雨を利用して、身体を洗った。

1時間も雨のシャワーを浴び続けたアガーテは冷えた身体のまま小屋へと戻りタオルで丹念に身体を拭いた。

元の衣服を着てSG550を持ったまま2階へと登って寝室に向かった。

そしてベッドに入る。

ベッドはシングルだ。

シーツを肩まで掛けてSG550を抱き締める形で眼を閉じる。

こんな日は、ライフルを抱えて眠ると安眠できる。

主は雨が嫌いだ。

自分は雨が好きだ。

嫌な事も全て流してくれるから。

だから自分は雨が好きだ。

主は、嫌な事も好きな事も全て流すから雨が嫌いなのだ。

幾千、幾万もの年月を生き続ける彼には、確かに雨は嫌いな物だろう。

だが、自分は恐らく幾千、幾万と年月を生きようとも雨が嫌いにはならないだろう。

これは断言できる。

ライフルを胸に抱いてアガータは夢の世界へと旅立った。

アガータは夢を見た。

何も無い暗い世界で、一筋の光が輝いていた。

その光に足を進めると、主が居た。

とても小さな身体で子供のようだ。

子供サイズにまで縮んだ主だが瞳だけは澄んでいたが、それでいて鋭い刃物のようだった。

そして自分が膝を着くと抱き付いてきた。

温かい感覚を夢の中で覚えた。

主は自分を小さな両手で抱き締めてこう言う。

『アガーテ。嗚呼、愛しい我が女にして、我が親友の妻であった女』

そう自分は、亡き主の親友の妻であった。

歳の差があつたが、夫婦は円満で子供も二人できた。

しかし、一気に失った。

主は泣いていた。

背中越しから流したのであろう涙が伝つて来る。

それを自分は背中で受け止めて、主を強く抱き締めた。

『嗚呼、我が主にして愛しい人よ。どうか泣かないで。貴方が泣いては、私は哀しい』

嗚呼、主よ。

泣かないで。

泣いては私も哀しい。

故に泣かないで、笑って下さい。

貴方は悪くない。

誰も悪くない。

貴方の業は、私の業。

貴方が地獄に墮ちるのであれば、私も付いて行き、共に地獄へと墮ちましょう。

地獄へ墮ちても、我が身は貴方様の物。

何時如何なる時も、私は貴方から離れない。

死しても魂は、貴方と共にある。

ソプラノの声で言いながら主を抱き締め続けた。

主の嗚咽が止んだ。

そして自分から離れて・・・笑った。

屈託のない笑顔で。

『嗚呼、アガーテ。貴方は、私を護ってくれるのか？』

『命が尽きようとも、我が身は貴方様と共にある事を誓いましょう』

『何に誓いますか？』

『貴方様の眼と同じ色の月に掛けて誓いましょう』

『月は気紛れです。どうか別な物に誓って下さい』

『ならば、この銃に掛けて誓いましょう』

何時の間にか手に持っていたクラシックな銃を持ち、目の前に翳す。

『月とは違い気紛れではありません。この銃に掛けて、貴方様を如何なる災難からも護り通して見せます』

『ありがとう。アガーテ。我が愛しい女よ』

主が自分の両頬を両手で包み込み、口を近づけて来る。

自分はそれを閉じて、待つ。

そこで夢は終わった。

アガーテは夢から覚めて、ベッドから起き上がった。

カーテンの隙間から光が自分を照らしている。

カーテンを移動させると明るい光が部屋を照らす。

闇の世界に生きる自分には、余りに明る過ぎる光だ。

片手で光を防ぎながら、窓を開ける。

清々しいまでの風がアガーテを包み込む。

まるで主に抱き締められた感覚と同じだ。

『嗚呼、愛しい我が主。貴方は風となり、私を抱き締めてくれるのですね』

風になり、自分の所まで来てくれたという錯覚を覚える。

否。

錯覚ではない。

主が風となり、自らの元へと来てくれたのだ。

だから、きつとあんな夢を見たのだ。

きつと自分を試したのだろう。

愚問な事をしたと思うも、何処で嬉しいという感覚がある。

試されているのであれば、証明してみせよう。

『我が銃は、弓にして、槍であり、剣なり。その刃は我が主に仇な

す者を一名も残さず葬り去る破壊の爪牙なり』

どうか、ご安心を。

誰も貴方に向けて、この破壊の爪牙を振り翳したりはしない。

この破壊の爪牙を振り翳すのは敵対者のみ。

もし、仮に翳したのであれば……自ら命を断とう。

それが自分なりの忠誠であり誓いだから。

アガーテはSG550を持ち2階から降りた。

ドアを開けて昨夜、試射をした的に立つ。

『静かに……清らかに』

SIG SG550を立射の姿勢で構えた。

右目をスコープにやり狙いを定めた。

人差し指に引き金を掛けて……ゆつくりと引いた。

弾は空を切り回転して的中心に当たった。

風がまた吹き、腰まで伸びた金糸を揺らした。

撫でられた気持ちになり、アガーテは眼を閉じて余韻に浸った。

『嗚呼、貴方様に撫でられる感じですよ』

あの夜と同じ感覚だ。

アガerteにはそれが堪らなく嬉しかった。

その日から2日掛けてアガerteは、ずっと狙撃の練習を繰り返しては感覚を取り戻す事に徹した。

第四幕：闇の情報屋

アガールテはフランスのマルセイユにある自身の自宅兼職場へと帰って来た。

3日間はバイト生に任せておいた。

バイト生だがしっかりしているから心配は無い筈だが後で確認の為に訊く事にする。

店のドアを開けて中に入り奥へと進み階段を登った。

階段を登った所から自分の家になる。

部屋の構造は洗面所とバス・ルームが一緒という典型的な洋風の構造で寝室は厨房と一緒にしてある。

寝室兼厨房は右側にある。

右側のドアを開けて中に入る。

一気に脱力感を感じる。

ベッドに鞆を置いて、自身も横になる。

これから暇を見ては、射撃場などで銃の練習をしようと思った。

格闘技は些か苦手な面もあるアガールテだが、射撃は得意な方だと自分でも思っている。

彼女の姉弟子に当たる女豹の異名を持つ女殺し屋は格闘技も射撃も得意だ。

殺し屋としての経歴も自身より上で年下でありながら、確実に生きる術を知り尽くしている。

だが、射撃ならば自身の方が上という気持ちだった。

自惚れではなく本当に自信があるのだ。

それは周りも同じ意見だった。

自分の主とその相棒も以前こう言っていた。

『あいつは滅茶苦茶に撃つ癖が時々だがある。殺し屋は無駄撃ちを好かん』

それに対して自分は、違うと二人は言った。

『お前の場合は、一発一発にまるで、自身を乗せるようにして撃つ。一撃必殺を旨とする狙撃手ならではだ』

つまり、射撃に関しては自分の方が優れている、と遠回しに言われたのだ。

これが自信だった。

しかし、3年のブランクは大きい。

先日から3日ほど射撃の練習をしたが、これからはもっとしよつと改めて思う。

それと同時に今は、獲物が何処に居て、何をしているのか、なども詳しく知らなければならぬ。

資料には経歴と特技などを詳しく書かれているだけで、現在の情報は無かったのだから。

「先ずはあの人の所に行つて情報を収集しないと」

今日は休みだ。

それならば今の内に行こう。

アガートはベッドから立ち上がり、上着などを脱いだ。

洋服棚を開けて黒いレディースのスーツを一着取り出した。

それを着た。

白いYシャツの上から革製のホルスターを右腕に吊るした。

棚の中から木製の箱を取り出して蓋を開けた。

中には一丁の拳銃が鈍い色を放っていた。

小型の拳銃でシリンダーが横からはみ出ているからリボルバーだ。

S & amp; W M36 チーフススペシャルだった。

アメリカの老舗銃器メーカーS&W社が開発したりボルバーでコルトのデエクティブスペシャルと並び小型リボルバーの代名詞と知られている。

しかし、精度的に言えばS&Wの方が遙かに上だ。

このM36は38スペシャル弾を使用する5連発。

これは1発分犠牲にしながらも可能な限り・・・限界まで小型化した代償である。

この銃がアガーテの愛銃でもある。

主から勧められてこれを手にした。

リボルバーは初心者でも扱い易い上にジャム・・・弾詰まりが少ないからだ。

しかし、今の時代ならジャムなどそう簡単には起こらない物だ。

かと言って装弾数が多過ぎるとなぜそんな物を持っている？と訊かれた時に困る。

だから、敢えてリボルバーにしたのだ。

何より5発以上の相手をしない事も想定されている。

S&W M36チーフスペシャルをショルダー・ホルスターに入れた。

今回は特にバックアップガンを持つ必要は無いと思い持たなかった。予備弾は纏めて装弾できるスピード・ロッダーを3個ほどシヨルダール・バッグに入れた。

金系の髪を頭の上で団子状に纏めて、サングラスを掛けて部屋を出て階段を降りた。

またドアに鍵を掛けて、ルノーに乗り込んで出発した。

目指すのはパリの喫茶店だ。

そこに自分と同業者でこちらも年下だが兄弟子が居る。

その喫茶店のオーナーは女性で、情報と武器を裏では扱っている間の何でも屋でもあり自分も鼻肩にしている。

何時もなら予め連絡を入れるのだが、今日は連絡なしで行く事にした。

パリまではかなり距離があったが、ドライブは好きなので楽しい一時であった。

港街のマルセイユに比べてパリは『芸術と花の都』という異名を取っている。

ルーヴル美術館には、絵画、彫刻などがあるし、香水、音楽なども一際目立っているのが理由と言える。

パリ生まれの男子はパリ・ジャン。

パリ生まれの女子はパリ・ジャンヌ。

こう言われて、他国からは憧れと羨望の眼差しを受けているが、現実にはそれほど甘くないというのが世の常だ。

何処の国もそんなものだが、パリは世界屈指の観光地という事もあり、その衝撃は並大抵の物では無い。

パリの12区ある内の8区、シャンゼリゼ通りの片隅にある喫茶店に到着したアガール。

ルノーから降りて目的地の喫茶店の中に入った。

パリの喫茶店にしては、外にテーブルを置いたりせず中だけにしているのもこの店の特徴と言える。

「こんにちは」

「あら、アガールさん」

白いエプロンをしてカップを磨いていた、パリ・ジェンヌがアガールを見て微笑んだ。

年齢はアガールより3、4つほど年下で愛嬌がある娘だ。

「いきなり来て御免なさい」

「貴方なら大歓迎よ。内の“宿六”より御鼻屑様だから」

「そんな風に言っただけは駄目ですよ」

あの子にはあの子なりに考えがある、とアガーテは庇った。

「そうなの？ 私には行き当たりばつたりの見えるけど」

「そうなんですか？ 私には何時も優しく、凜としていますけど……」

「まったく……外面だけは良いんだから」

パリ・ジャン又は呆れながら愚痴を零した。

「それで今日は何かしら？ 新しい弾丸？ それとも情報？」

「情報の方です」

アガーテは一枚の写真を取り出した。

「あら、この男が今回の獲物なの？」

「知っているんですか？」

「ええ。最近、警察を辞めて殺し屋になったフリーの駆け出しが居るって聞いたから」

「その男の情報が欲しいんです」

「良いわ。私の今持っている情報だと、この男に依頼する者は殆ど

チンピラ上がりの雑魚ばかりよ」

「でも、G I G Nに所属して現に射殺した過去もあるんですよ？」

G I G Nはあくまで人命尊重をモットーにしているが、いざという時は犯人を射殺する事もある。

現に過去数百件の内、10数名の犯人を“処理”してきた経歴がある。

「でも、それは警察と言う組織の中だけ。この世界での実力は未知数よ」

確かに、それは言えている。

警察で射殺の経歴を持っていようと、それが本当かどうかも怪しいし、何より警察という組織から出身者と言う事もあり、アンダー・カバー（潜入捜査）の可能性も捨て切れない。

そのため、チンピラ上がりの組織でしか未だに雇ってもらえないらしい。

「私の読みでは、この男は焦っている筈よ」

「焦っている？」

「ええ。警察を辞めて恐らく殺し屋となり一攫千金でも夢見たんでしょうね。現にこのヨーロッパで殺し屋になり一攫千金を得た者たちは数多いから」

言わば、アメリカン・ドリームならぬヨーロッパ・ドリームなのだ。
闇が最初に付くが。

「でも、現実には甘くなかった」

「そういうこと。大方、何処の組織に自分を売り込んでもてんで相手にされずに、3流殺し屋に収まったって感じね」

それでどうにかして大物組織に雇われようと焦っている。

「ここで質問。どうやったら大物組織に雇われる？」

「このヨーロッパで仕留めれば、直ぐに名を上げられる人物を倒す事」

「その通り。では、このヨーロッパで、それだけの価値がある人は？」

「我が主……伯爵様ですね」

アガーテの答えにパリ・ジャン又は笑った。

アガーテの主は、ヨーロッパを中心に闇の世界の帝王とも言われている、伯爵だった。

名前は不明で、年齢も不明。

しかし、その瞳は見る者を威圧し、声で相手を殺せるとも言われている。

いつ生まれたのかも知らないが、かなり古い時代から生きているという事は解かっている。

そして、この男を倒せば裏世界で一躍有名になれる事としても有名である。

「恐らく今回、この男を始末しろと言うのも、伯爵様の命を狙っているからでしょうね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

1ヶ月の期日とは、恐らく彼と彼の命の期日なのだ、とアガーテは今更になって気付いた。

「私の知っている情報はここまで。ここからは有料よ」

つまりここからは調べるとい事だ。

「金に糸目は付けません」

キャッシュで即日払い、とアガーテは言った。

「毎度 それじゃ今から調べるわ。今日はどつするの？」

「これから射撃場に行って、銃の鍛錬です」

「そう。それじゃ、分かったらそっちに行くわ」

「分かりました」

アガーテは喫茶店を出て、射撃場へと足を運んだ。

第五幕：？と恋人

パリにある射撃場の中にアガーテは立っていた。

ヨーロッパは銃規制がそれほど厳しくは無い。

ただ、銃を携帯するには免許所とちゃんとした理由が必要とされている。

別に家に置いておくのは問題ではなく持ち歩く事が問題されているだけの話である。

射撃場はパリの中にも幾つかあり、観光客向けにも開放されている。

そこでアガーテはS & amp; W M36チーフススペシャルを片手で構えて撃っていた。

引き金を引いて的に何発か当てた。

ライフルの方がブランクを直すのは早い筈だが、アガーテの場合は拳銃の方が早いようだ。

しかし、心臓部には遠い。

『拳銃のブランクも困ったわね』

射撃の腕は自信があるが、やはりブランクは痛い。

何発か撃ち続けては、感覚を取り戻す事に努めた。

2時間ほど時間を潰していると、喫茶店のパリ・ジャンヌが来た。ジーンパンにカジュアルなカーディガン姿であった。

手にはシャネルのハンドバッグと茶色の封筒が握られていた。

「お待たせ。御注文の品を持って来たわ」

「見せて下さい」

直ぐに射撃を止めて、休憩室に足を運んで資料を見る。

獲物は現在、スペインで仕事をしているらしい。

「何でもドラッグの売人が司法取引に応じたから、それを阻止する為に行ったらしいわ」

「ドラッグですか……」

「まあ、金を稼ぐには一番の方法なのは、否定しないわ」

でも、ここではそんな真似をすれば命が幾つあっても足りない、と付け足す。

ヨーロッパではコロンビアなどからの麻薬が密売される。

コロンビア製の麻薬は純度も高く、それだけ高額だから急いで金を稼ぎたいなら持って来いだ。

だが、伯爵は麻薬を嫌う。

そのため警察と連携して、麻薬を取り締まったりもする。

マフィアと警察が手を組むなど前代未聞だが、警察では伯爵を尊敬している者まで居るから大した人望だ。

「で、その仕事を片付けるのにおよそ1週間から2週間は掛るわね」
警察でも事前にキャッチしているからか、警備が厳重でチャンスが無いらしい。

更に情報収集なども考えれば、それだけ掛るのも無理は無い。

「これは貴方にとってもチャンスでしょ？」

ブランクを少しでも直す為に。

「ええ。それでこの他に資料は？」

「この男、それなりに女好きなの」

内の宿六よりは女好きじゃない、とパリ・ジャン又は言った。

宿六と言われている男も伯爵に仕える者で殺し屋だ。

ナイフ技術に長けており、“切り裂きジャック”と言われている。

しかし、女好きと殺しの現場に証拠を残す癖があるらしい。

更に金も踏み倒したりするなどする事からパリ・ジャンヌには、宿六と有り難くも無い名前を頂戴しているのだ。

話を戻すと、この獲物も女好きらしい。

「仕事前には必ず女を抱くの。しかも三日間ぶっ通しでね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「好みのタイプは、何処か儂げで清楚系。高飛車な女はお断り。ストリップを好んでやらせるらしいわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうやら清楚な娼婦にストリップをやらせて、その恥ずかしがる様子を見て楽しむらしいの」

アガーテは沈黙していた。

とんだ変態も居たものだ、とパリ・ジャンヌは顔に似合わず言った。

「儂げで清楚。・・・貴方にピッタリね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アガーテは、とても不快な顔をした。

こんな変態に好かれたくない、と全面に押し出していた。

「まあ、ただの情報として受け取っておいて。かなり用心深い男だ

から。狙撃するのは難しいと思ったの」

だから、ここで娼婦などに変装して近付けば良いと思った、とパリ・ジャン又は弁解した。

どうやらアガーテを怒らせたかもしれない、と思っただらしい。

「参考程度に聞いておきます」

アガーテは怒らずに頷いた。

「ありがとう。私もまだまだね。御鼻屑な客を怒らせるなんて」

パリ・ジャン又は苦笑しながら煙草を取り出して銜えた。

しかし、直ぐに煙草を戻そうとした。

「どうして戻すんですか？」

「え？貴方、煙草嫌いじゃなかった？」

前に一度、煙草を吸い苦情を言われた事をパリ・ジャン又は思い出したらしい。

「昔の話です。煙草は吸いませんが、別に相手が煙草を吸っても不快に思いません」

「そうなの？助かるわ。今じゃ何処もかしこも禁煙で喫煙者には形見が狭いから」

そう言つて煙草を銜える。

自分で紙を捲いて吸う手製の紙巻き煙草であつた。

些か不器用な捲き方から、アガーテは推測した。

パリ・ジャン又は、シャネルのハンドバッグからカルティエの洒落たライターを取り出して、火を点けた。

「そう言えば？さんは、どうしたんですか？」

パリ・ジャンヌの喫茶店に居候している宿六こと殺し屋には、？という偽名がある。

何時もなら店に居るのに居なかつたから、気になった。

「宿六なら“お嬢様”とデート中。朝から香水とか服を選んでいたわ」

パリ・ジャン又は、何処か面白くない口調だつた。

「……まったく、私の時は荷物運びだから嫌だつて逃げるくせに」

ぶつぶつと煙草を吸いながらパリ・ジャン又は愚痴を零した。

「貴方も彼も若いから仕方ないわ」

アガーテは苦笑しながら資料を封筒に戻して笑つた。

「そりゃ、まだ23歳だけど宿六よりは歳上だし、性格的にも上よ」「あいつは自分に甘くて他人には厳しい。

しかし、自分は自他共に厳しい。」

そこが違う、とパリ・ジャン又は煙草を吸いながら言った。

「でも、私から見たら若いわ」

私はもう30を越えたから、とアガータは言う。

「何を言っているのよ。女は30を越えてから良い女になるのよ」「年下の女にこうも説教をされるとは、とアガータは苦笑した。

「ねえ、それよりこれから少し買い物でも行かない？」

「構いません。何処に行きます？」

「そうね。取り敢えず2区で買い物しましょうよ」

「あそこは余り好きじゃないんですけど……」

2区は、オペラ界隈と呼ばれ、高級ショッピング店から銀行などが並ぶセレブレティな者たちが集まり易い場所だ。

その他にも日本食などを扱う店もある。

アガータは、自分のような者が行く場所ではないと思っていた。

元より華やかな場所は苦手なのだ。

「偶には嵌めを外しましょう」

パリ・ジャン又は尚も強く言ってきた。

「それじゃ……見るだけなら」

「決まりね。それじゃ、行きましょう」

パリ・ジャン又は屈託のない笑みを浮かべて、アガールテを伴い射撃場を出た。

パリのオペラ界隅を歩くアガールテとパリ・ジャンヌ。

二人揃って美人であるため男達が声を掛けるもあえなく撃沈している。

二人は先ずショッピング店に行き、アガールテの服を選んだ。

「何時も背広姿なんて勿体ないわ。もっとお洒落しないと」

パリ・ジャン又は色々と服をアガールテに合わせては唸る。

「そんなお洒落をしたいとは思いません」

アガールテ自身はお洒落に気を使うのが好ましくなかった。

何よりスーツの方が自分には好ましい。

何処に行こうと目立たないし、大人としての平常服と言う事もある。殺し屋も嘗む自分などには、黒のスーツが一番だ。

まあ、場所にもよるが、スーツが妥当なのだ。

黒だと血を仮に浴びても対して目立たない。

「そんな事を言わないの。女は着飾ってこそ何だから」

パリ・ジャン又は嫌がるアガーテを解き伏せる如く言い続けた。

ドアが開く音がして、アガーテはそちらに眼をやった。

金髪の男性とプラチナ・ブロンドヘアの娘だった。

男の方は黒いスーツにサングラスでネクタイはダーク・ブルーだった。

女性の方は水色のフリルが付いたワンピースに白いガルボハットを被っていた。

とても気品ある女性で、何処かの令嬢と思える。

男がアガーテの姿を見て、近付いてきた。

「これは、アガーテさん。相も変わらず美しいですね」

「久しぶりですね。ヴァインセントさんにマリイ様」

アガートは二人の名を言った。

「こんにちは。アガートさん。ラビーヌさん」

マリイと呼ばれた女性はアガートと一緒に居るパリ・ジャンヌに挨拶をした。

「こんにちは。宿六に何か酷い事をされなかった？」

「いいえ。ただ、今日……初めて……キスを……されただけです……」

きやあ、とマリイは頬を赤く染めて、両手で隠した。

それだけで保護欲をそそられそうだ。

「はー、やっぱりマリイちゃんは、良い子だ。何処かの“暴力女”と違ってな」

「何で私を見るのよ」

ラビーヌと呼ばれたパリ・ジャンヌは、睨みつけるようにしてヴィンセントを見た。

「怒るって事は、自覚しているのか？」

「あんだ、ぶん殴りたいの？」

「ここは店の中だけ？それにパリ・ジャンヌってのは、お上品で華

やかな筈だぜ？」

「時代錯誤も良い所ね。それに今は、男女平等社会よ。あんたを殴っても罰なんて当たらないわ」

「おお、怖い怖い」

ヴィンセントは、恐れ戦くように身を引く。

「ラビーヌさん。ヴィンセント様に手を上げないで下さい」

マリイがヴィンセントを庇うようにして立った。

「マリイちゃん。貴方がこの宿六を好きなのは痛いほど解かるわ」

ラビーヌがマリイにまるで言う事を聞かない妹を解き伏せるようにして、喋った。

「だけど、こういった男は、女がしっかりと手綱を握らないと、何処にでも行っちゃうのよ？」

それこそ何処で女を孕ませるか分かったものじゃない、とまで言い切った。

「ヴィンセント様。まさか、ラビーヌさん以外の女性にも手を出したのですか？」

マリイは、ヴィンセントを上目使いで睨んで来た。

どうやらラビーヌと肉体関係を持っている事を知っていながら、容

認している様子だ。

「まさか。そんな事をしたら、君の御父上に殺されっちまうよ」

ヴィンセントは、マリイの父親、すなわち将来の義父に当たる男を思い出したのか身震いした。

それを見てアガーテは何処か納得していた。

『あの方なら、やりそうだわ』

マリイの父親は、彼女が仕える主の父親に仕えている男。

かなり上位クラスに食い込む容姿をしているが、性格はかなりやばい。

まあ、職業柄なのだろうが、特にこのマリイは眼に入れても痛くないほど溺愛しているらしい。

その愛娘を泣かせたとあれば、恐らくヴィンセントを本当に殺す事だろう。

「あの人に狙われたら、それこそザミエルに狙われると同じね」

ラビーヌはアガーテを見た。

「私は、別にヴィンセントさんをどっこいしょじょうとは」

「ただの例えよ。そんなに真面目にならないで」

ラビー又は苦笑した。

「アガーテさんに狙われるほど落ちこぼれていないぞ」

ヴィンセントはアガーテの発言に眉を顰めて言い返した。

「あらそう？まあ、3年前に比べればマシになったけど、
“まだまだ”ね」

「……好い加減、その口を閉じさせられたいのか？」

「貴方みたいな若造に出来るのかしら？」

「……上等だ。この場で、てめえをやって後世の憂いを
断つとしよう」

「お生憎様。まだあなたには借金が山ほどあるから死ねないわ」

「死ぬ直前まで金に執着するか。……強欲の権化が」

「お褒めに預かり光栄だわ」

ヴィンセントの挑発にラビー又は笑みを浮かべて応えたが、眉が痙
攣しているからやはり怒っている様子だ。

険悪なムードになり始めた二人。

「二人とも、ここは店内ですよ」

アガーテの一言で険悪なムードが壊された。

まるで一発の銃弾で壊された窓ガラスのように。

「ここは、他のお客様も来る場所です。この場で事を起こす事は私が許しません」

もしも、事を起こすのであれば、私が止めます。

それこそ鉛を撃ち込む覚悟です。

その一言で二人は一気に仲良くなった。

「や、やだなあ。じよ、冗談ですよ。アガーテさん」

「え、ええ。そ、そうよ。だ、だから、そんなに怒らないで……
……」

アガーテは到って普通だが、二人にはそう見えなかったらしい。

後日二人は口を揃えてこう述べた。

『獵犬を連れて、弓と斧を持った狩りの魔王が立っていた』

第六幕：獲物と狩獵

フランスのマルセイユに船で降り立つ一人の男がいた。

黒い背広を着て、サングラスを掛けた男はサングラス越しに鋭い視線を前に向けていた。

黒いアタッシユケースを持っていた。

その男は船から降りると、停めてあった一台の車に乗り込んだ。

「スペインの仕事、失敗したって？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

車の中には、一人の男が座っていた。

その男の問いに男は無言だった。

「・・・・・・・・どうやら、俺はお前の実力を買い被り過ぎていたようだ」

「今度は、必ず・・・・・・・・」

「この世界で、今度は無い」

一度でも失敗した事を拭えない。

信頼とは得難い物だが、簡単に失う物である。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「命までは取らん。だが、もうお前とはこれつきりだ」
降りろ、と男は言った。

「ま、待ってくれ。こ、今度の仕事は・・・・・・・・」

「言った筈だ。もうお前とは縁を切る。碌に仕事をこなす事も出来ない奴を雇うほど金も無ければ暇も無い」

「ま、まって・・・・・・・・」

「速く消える。そして、二度と俺の前に現れるな。伯爵の件は別の者に任せる」

男は肩を落としたまま車から降りた。

車から降りた男を残し、車は走り去った。

「くそっ」

男は舌打ちを漏らし、マルセイユへと向かった。

男の名は、ハンター・ティモンズ。

元フランス国家憲兵隊介入部隊、通称GIGNに所属していたスパイパーで、今はフリーの殺し屋。

今回もスペインで仕事を請け負って、向かったが依頼を完遂する事

に失敗した。

そのため契約していた組織から“首を切られた”のだ。

と言つても、本来ならば“首を切る”のは本当に胴から跳ばす事だが、今回は大目に見られた。

だが、これは殺し屋として致命的であり、屈辱的でもある。

いつそのこと本当に首を切られた方が彼にとっては幸せだったかもしれない。

「くそつ。必ず見返してやる」

ティモンズは舌打ちをしながら、手を切った組織を見返そうと心に決めた。

G I G Nでスナイパーとして活躍して来た彼だが、別に彼だけが優れた腕を持っている訳ではない。

G I G Nは隊員全員がスナイパーとしての教育を受ける。

だから、その気になれば皆がスナイパーとして生計を立てる事も難しくは無い。

だが、この男は隊の中で狙撃の腕前が一番だった。

それと同時に常人よりもプライドも高かった。

ちょっとした事でも怒る癩癩持ちだ。

それには一種の驕りが含まれている。

G I G N に居た頃、彼はスナイパーとして何人ものテロリストを葬ってきた。

しかし、作戦を無視した行動とおよそスナイパーらしくない短気な性格から世間はおるか隊の中でも嫌われていた。

そんな癩癩持ちの彼が、暗黒街に足を踏み入れたのは、民間人を共に殺したからだ。

テロリストが民間人の背中に隠れた。

手にはリモコン式の爆弾が握られていた。

それを知っていた彼は、敢えて“一人の犠牲で大勢の命を救う”事を選び、何の躊躇いも無く引き金を引いた。

本人は称賛されて然るべきと思っていたようだが、現実はそうではなかった。

マスコミから叩かれ、隊の長からも民間人を殺すとは何事だ、と激怒された。

弁明するも、それは明らかに隊の風紀を乱すと同時に、危険な考えであった。

何より、彼の狙撃は命令違反だった。

G I G Nは、作戦をする為に何度も情報を収集して会議を開いて人質に犠牲者を出さない事を旨としている。

それなのに彼は、独自の行動を起こした。

今までは大目に見てきた長も、民間人を躊躇いもなく殺した事で諦めたらしい。

彼から言わせれば、魔が差したという他ない。

だが、それ以外の言葉で表すならば、一つだ。

英雄願望。

そう、彼は英雄になりたかったのだ。

大勢の命を護る為に一人の民間人を非情に撃ち殺し、事前にテロを防いだ英雄。

本来ならば、そう新聞の一面を飾る筈だった。

だが、英雄ではなく、犯罪者として新聞の記事に飾られた。

その後の人生は坂道を転げ落ちるようなものだ。

妻には逃げられ、借金は嵩むし、仕事を失った。

典型的な転落人生と言える。

そんな彼は、世を憎み、今まで殺す筈のテロリスト側に立った。

そして暗黒街で最高のスナイパーとして君臨しようと考えた。

だが、こちらの方が表の世界よりも厳しかったのを身に染みる。

警察出身で、いま言われている犯罪者。

顔もデカデカと新聞に載せられている。

どう考えてもデメリットはあってもメリットは何一つない。

だから、殆どチンピラ上がりの組織しか彼を雇わなかった。

それも下の下。

三流の中の三流組織だ。

本来ならば、裏世界で薔薇色の人生を歩む筈だ、と彼は考えていた。

だが、現実には組織からも見放された。

この依頼を完遂すれば、今度は大物を狙撃するチャンスを与えられる筈だったのに自らチャンス逃がした。

「俺が何をしたんだよ……………」

愚痴を零しながら、彼は無性に女を抱きたい、という衝動に駆られた。

こう言った時は女を抱いて、何もかも忘れるのが一番だ。

彼は、何処かに“春を売る女”は居ないか探した。

しかし、彼の眼に敵う女は見つからない。

ここでも彼は、自分の運の無さに苛立ちを覚えた。

「あ、あの……」

ふと呼び止められ、振り返るティモンズ。

壁の隙間から、胸元が大きく開いたドレスを着た女が立っていた。

髪は黒で、胸も大きいし、腰のくびれも魅力的だ。

見た目は、惚げだ。

彼の好みだ。

年齢は20代後半から30代前半。

女と言う果実が一番、熟れた年齢と言える。

ティモンズは舐め回すように女を上から下へと見下した。

「わ、私を、か、買って……くだ、さい……」

女は初めてなのか、声が何処か震えていて、落ち着きが無い。

「……幾らだ？」

「50、ユーロで、良いです」

「ほおう。随分と安いな」

先ず安さにティモンズは惹かれた。

50ユーロで身を任せる女など高が知れている。

だが、目の前に立っている女は少なくとも1000ユーロ以上出しても可笑しくないのに、だ。

「わ、わたし、は、はじめて、で、あの、それで……………」

「なるほど…………良いぜ。買ってやる」

ティモンズは女に近付いた。

女は怯えた眼差しを浮かべる。

それを見て、彼の中に燻っていた嗜虐心が昂ぶる。

「お前の家は？」

「こ、こっちです……………」

女は先を歩き出した。

ティモンズは女の背中を見ながら、この女をここで抱いても良い、

と思った。

だが、それでは彼が好んでいるストリップが見れない。

そう思うと自然と理性が働いた。

連れて行かれたのは、粗末なアパートだった。

「ここが、私の家です」

どうぞ、とドアを開けて女は横に移動した。

「いや、お前が入れ」

「え？」

「他人に背を向けるのは、嫌いなんだ」

女は、おどおどしながらも先に入った。

続いてティモンズも入る。

女が部屋の明かりを点ける。

中は3LDKほどでベッドと厨房、洗面所があるくらいだ。

しかし、小まめに掃除をしている様子で、綺麗だった。

「良い部屋だな」

ティモンズは部屋を見回しながら、ベッドに腰を降ろした。

「さて、早速だが、ストリップをしろ」

「す、ストリップ………」

「客の命令が聞けないのか？」

懐から50ユーロを出すティモンズ。

「これが欲しいなら、速くやれ」

ピラピラと紙幣を振り強要を敷くティモンズの瞳は獲物を痛ぶる糞の眼つきだった。

「………」

女は観念した様子で、音楽も掛けずにドレスを脱ごうとする。

それをティモンズは欲情の眼差しで見つめる。

女がドレスに手を掛けて、胸を見せる。

張りのある良い胸だ。

スルスルと怖気づく小鹿のように脱ごうとする。

下の方まで脱ごうとした時だった。

ガードーベルトに挟んでいた小さな物が電光石火の如く動き、ティ

モンズに向けられると同時に引き金が引かれた。

小さな音がすると同時に、壁に小さな穴が空いた。

ティモンズは口を開けたまま動かない。

女の手には小型オートマチックのFNブローニングM1906が握られていた。

ティモンズの口から血が流れて、ベッドに仰向けに倒れた。

「……呆気ないわね」

女は、ブローニングをガーターベルトから抜いて、煙を吐く銃口に息を吹き掛けた。

煙は直ぐに消えた。

直ぐにティモンズに近付いて、額に残りの弾を撃ち込んだ。

「……」

撃ち終えたブローニングM1906をガーターベルトに戻し、ドレスを着直した女は部屋を出た。

そして何食わぬ顔で路地に出て、停めてあった車に乗り込む。

「任務完了です」

「了解したわ」

運転席に居た茶髪の女が携帯を徐に取り出して掛けた。

「私。ガブリエルよ。獲物は仕留めたわ。無論、親子揃って・・・ね」

それだけ言っつて携帯を切るガブリエル。

車を道路に出す。

「どうだった？ティモンズは？」

「大したことはありません。私の脱ぐ所を見ているだけで、欲情していました」

「そうなの？相手もそれなりに出来るから、手こずると思っていたけど」

「私も拍子抜けです」

あそこまで簡単に仕留められるとは思ってなかったと女は話す。

「まあ良いじゃない。これで、あの人も貴方の腕を認める筈よ。ザミエル」

「・・・はい」

ザミエルと言われた女は頷いた。

徐に黒髪を手で引つ張った。

すると黒髪から金糸の髪が出て来た。

カツラだった。

「やっぱり、貴方の髪は金髪の方が似合うわ」

「私もそう思います」

ザミエルは、苦笑しながら傍らに置いてあるSIG SG550を見た。

これでつい先ほど、ティモンズを雇っていた組織の長を殺した。

ティモンズが車から降りて、徒歩で街へ行く途中、車の中に居る長を窓ガラス越しに狙撃した。

それから即座に衣装に着替えて、先回りしてティモンズを待ち構えたのだ。

「出来るなら娼婦の格好は嫌でした」

「あらそう？結構、画になっていたし、様になっていると思うけど？」

ガブリエルは意地悪そうに答えた。

「……ガブリエル様は、意地悪ですね」

天使なのに、とザミエルは言う。

「お生憎様。私は天使だけど、“墮天使”なの」

だから、意地悪で、冷酷なの。

ガブリエルは声を上げて笑った。

何故かその笑い声が、ザミエルの仕える主と似ていた。

そのためザミエルは、まるで主が笑っているように見えた。

『貴方様の笑顔を、隣で見たい』

ふとそう思った。

その後、ザミエルは、本格的に裏世界へと道を歩み始める事になる。

終幕：幸福と祝福を

アガーテは、主と二人切りで食事をしていた。

場所は彼が愛するマルセイユの老舗レストランで魚料理が絶品だ。

2階を全部、貸し切りで舞台ではシャンソンをプロの音楽家たちが演奏していた。

「・・・見事だったな」

主である伯爵はフォークを刺したフォアグラを噛み砕いて、喉に通してからアガーテの仕事ぶりを褒めた。

「お褒めの言葉を預かり光栄です」

アガーテは黒いイブニングドレスを身に纏った格好で小さく一礼した。

その間も音楽が奏でられている。

「今回の仕事の報酬は今日中に振り込んでおいたから確認しておけ」

「分かりました」

それと、これは俺からの報酬と伯爵は指を鳴らした。

小さな箱を持った執事風の男が現れて、アガーテに渡した。

アガーテは箱を開けてみた。

中身は銀色の指環だった。

ただの変哲もない指環だったが、アガーテにはどんな宝石を散りばめた指環より大切な指環に思えた。

「その銀の指輪はお前さんにやる」

お守りにでもしてくれ、と伯爵は言った。

「ありがとうございます」

アガーテは指環を取った。

指環の内側には小さな文字が彫り込まれていた。

『我を護る忠実な狩人にして、高貴な女神でもある。故に祝福と加護を』

「嵌めてやるっ」

伯爵は椅子から立ち上がり、片膝を着いてアガーテの左手を取った。

薬指に指輪を嵌めてくれた。

まるで結婚したような錯覚をアガーテは覚えた。

指環を嵌めたアガーテは伯爵に礼を述べた。

その後、ザミエルことアガーテは裏社会へと本格的に足を踏み入れた。

後にザミエルと言う名は、暗黒街で知らぬ者はいないとされ、狙われたら何処に逃げても仕留められると言われた。

まさしく魔弾の射手となったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1485t/>

暗黒街の狩人

2011年5月9日21時36分発行